新 刊

□伊藤 洋（編）：**1998年版埼玉県植物誌** 833 pp．埼玉県教育委員会．￥3,200＋800(送料)．

埼玉県の学校の先生方が中心となり，10年をかけて調査収集した新たな資料に基づいて編纂された．1962年の埼玉県植物誌以来のものである．標本は埼玉県立自然史博物館で閲覧できる．主体は485頁におよぶ植物リストで，約2000種類の維管束植物が短い説明と共に記録され，それらの分布図が200頁にもわたって示されている．コケ類(採集者略号，標本番号，市町村名を伴う)，藻類（簡単な説明，産地，文献番号を伴う），地衣類（植物名のみ），菌類（植物名のみ）についても，類書に抜きんでた丹念さで，過去の記録も含めてまとめられている．秩父地方の植物方言，植物学用語集（解説つき）がついている．全体として神奈川県植物誌に似ていて，それから検索表や植物図を省いたものという感じである．神奈川県のときには気づく間がなかったのだが，時をへて生じてきた注文をこれを機会に記しておく，分布図は市町村界を描いた白図に一地区一点で表示されている．地元の方にはその点がどの地区を示すものかおわかりなのだろうが，余所者には見当がつかないのである．まっ白な地図に点を打った分布図よりも，この方が情報が多いのだから，せめて網目模様と地区名の対照表を，分布図の先頭にでも付けてほしい．県分布図は自県の境界しか描かないものが多いが，たとえば東京都と山梨県の境界が少しでも引き出してあると，それだけでも余所者にとって地理的な理解度は飛躍的に増大する．つまりどの辺が平地でどこらが山地かが，そういう無用な線があるだけでかなり見当がつくのである．藻類のリストにあるような，本文にごく簡単でも資料の記述があれば，標本や文献の検索に有用だろう．1962年の植物誌と比較して，今回見いだせなかった植物215種類もリストされているが，変遷の記録として後日意味を持つ可能性がある．ボリュームのわりに安価であるが，1998年9月15日締切りの予約限定頒布なので，この紹介文では間に合わないかも知れない．照会は郵便またはFAXで下記へ．〒369-1305 埼玉県秩父郡長瀞町1417-1 埼玉県立自然史博物館内さいたま植物資料普及会Fax0494-69-1002． （金井弘夫）

□埼玉県環境生活部自然保護課（編）：**さいたまレッドデータブック** 411 pp．1998．同課．

埼玉県植物誌の編纂と平行して行われた絶滅危惧種の調査と評価の結果で，維管束植物ばかりでなくコケ，藻，地衣，菌類も含む845種類がリストされている．リストの項目は和名，学名，県内の分布（郡単位），形態の特徴，県外の分布，生育地，生活型，減少の要因，備考のほか，危険度の全国カテゴリーと埼玉カテゴリーが対比されている．危険度の評価が国レベルと地域レベルで異なるのは当然で，国のRDB公表を追って各地で地域別のレッドデータプランツの再評価がなされ，本書もその一つである．バイカモは絶滅と判定されている．ドクウツギもごく近い将来絶滅の危険性が極めて高いとされており，その要因は河川開発や道路工事であるという．減少の要因の中には人為的なもののほか，自然遷移という条件が挙げられているものがかなり多い．巻末に約1300件を含む埼玉県植物関係文献目録がある．入手については下記へ照会されたい．浦和市高砂町3-15-1 埼玉県環境生活部自然保護課（電話048-824-2111）．

（金井弘夫）

□小林禧樹，黒崎史平，三宅慎也：**六甲山地の植物誌** 301pp．神戸市公園緑化協会．￥5,300．

六甲山の植物は古くから調べられ，これまでにいくつもの植物誌が作られている．おそらくわが国では最もよく調べられた地域の一つだろう．一方，阪神地域に近いことから，中世以来石材の採掘や薪炭材の乱伐に加えて，近年では行楽，リゾートの対象として開発され，それらに呼応する災害とその復旧でも繰り返し話題になった．本書は最近のレッドデータブック作成の関係で，あらためて詳細な調査を行い，標本に基づいて作られたもの

である．折悪しく大震災におそわれた時期で，調査にも資料整理にもとりわけ苦労が多かったことだろう．過去に記録や標本があるものの，今回確認できなかった植物がたくさんあるのは当然の成り行きだが，新記録の植物も数多く見つかったという．自然の調査というものが，「これで終わり」というものでないことを実感させる．内容は1.調査地域の自然環境，2.植物調査研究史，3.植物相の特徴，4.六甲山地の絶滅危惧植物，5.生物多様性の保全をめざして，6.六甲山地の植物目録，7.文献，付表1.採集地点一覧，付表2.研究史年表（1879～1960年），索引である．第3章では注目される植物として78種類が，分布図つきで45頁にわたって詳述されている．その中で，絶滅危惧種の選定に「昔はたくさん見られたのに今は...」と感覚的に判断することのあぶなかしさの例として，タカサゴソウのケースが述べられている．本書の主体をなす植物目録は175頁にわたり，シダ植物以上1693種類が記録され，植物名に続いて産地と標本が列記されている．検索表や形態の記述はなく，産状や分布についてごく短いメモがついていることがある．標本の大部分は頌栄短期大学の収蔵品で，引用は採集者略号と採集番号，頌栄短大以外の標本は必要に応じて所蔵表本室記号や日付が付加されている．過去に記録があるが確認できなかった種類については，脚注にコメントされており，著者の判断で「誤認と思われる」というような記述も少なくない．従来の植物誌は先人の記録に上乗せして種類数の増加を単純に誇る傾向があり，こういう否定的な記事はなかなか書きにくいものであるが，自然を正しく認識する上で是非必要で，後続出版物が見習ってもらいたい．付表2では主要な植物の記録や主な行事，出版物の刊行時点が列挙されている．全体として簡潔で手堅い印象で，地域植物誌の一つの行き方を示すものだろう．注文をつければ，標本の引用が簡潔に過ぎてわかりにくい．データベースとの関係と思うが，採集者の略号がたくさんあって，一々凡例を覗かないとわからない．ページを切り離して作業に使おうとすると（そういうことをやる人間がいるのである），面倒なことになる．略号はデータベースには便利だが，人が読むときには翻訳しておいてくれた方がよい．機関略号程度なら，数が少ないからどうということはないが... データベースの立場からは，人名の略号は姓を先頭にしておいた方が整理に便利なのではあるまいか？また，採集者が複数のときには一々それに対応した略号を用意しているが，これは将来行き詰まる心配がある．もう一つは採集地点一覧で，行政地名でリストされているのだが，他所者には具体的な位置の見当がつかない．これは地図に図示してほしかった．連絡先は次のとおり．神戸市公園緑化協会．651-0083　神戸市中央区浜辺通5-1-14　神戸商工貿易センタービル（Tel 078-232-4461 Fax 078-232-1498）．（金井弘夫）

六甲山は植物の豊富な所として知られ，昔からの多くの人が採集に行っている所であるが，今回それらの成果を纏めて発表したものである．現地調査以外に京都大学，都立大学などの所蔵標本も調べ，遺漏なき完成を目指して纏められている．シダ植物，被子植物の野性植物1693種，帰化植物266種が記録されている．六甲山は宅地や砂防ダムの造成のため著しく荒らされていて，過去に採集されていても，現在は見つからないものもかなり存在するようであるが，過去に採集された標本は，その地域の地域のかつての環境を示す上で貴重なものである．多数のカラー写真と，稀少な植物の標本の写真が載せられていて，一地域の植物誌としては豪華な本である．六甲山で注目される76種の植物の解説が付けられ，その過去と現在の状態，近畿地方での分布が述べられているのは貴重な記録である．本書は地方の植物誌を作る場合のよい例を示すものであろう．このような形で兵庫県植物誌が作成されることを期待する．

（山崎　敬）

□山岸高旺・秋山　優（編）: **淡水藻類写真集第20巻**　100pp．1998．内田老鶴圃．￥7,000＋税．

淡水藻の同定を主な目的として作られた写真集で，顕微鏡写真による藻体の全体像と分類上の特徴となる部分の拡大写真，それに必